

巻頭言



果樹研究の新たな出発

所長 梶浦 一郎

平成13年4月1日から、農林水産省所属試験研究機関の果樹試験場から農業技術研究機構という独立行政法人の果樹研究分野を担う果樹研究所になった。これは行政改革の一貫ではあるが、果樹産業の動向という視点から見ても、平成13年は節目の年と言えよう。

一つ目の節目は、今まで、政府の直接価格補償無しでやって来た我が国の果樹産業に、需給調整対策と経営安定対策をセットにした「新たな果樹対策」が導入された事。二つ目は、毎年安定して結果させるという基本的な管理技術とは逆の発想で、全摘果という生産調整が温州みかんで行われた事である。三つ目は、温州みかんにおいて、摘果に努めて生産調整し、品質もそこそこなのにもかかわらず、二度にわたって出荷停止をしなければならなかった消費の低迷である。四つ目として、各地で品質の変化、成熟の異常等が見られるようになり、地球温暖化のきざしが、各種農作物の中で、まず始めに永年性作物の果樹で出始めたことである。

法人化と果樹産業の節目という点から、果樹研究所の広報のあり方には、大きな変化が求められよう。果樹政策の変化から考えると、コスト削減等の生産側の価値観だけでなく、「アジアモンスーン地帯にある風土産業としての果樹栽培」として捉え、納税者や消費者に対して、果樹栽培、果樹園が

持つ多面的機能を訴えて行くことも重要となって来た。一方、消費する側にも食の倫理が求められ、生産資材だけでなく、果皮、果心、種子等についても廃棄物処理やリサイクルの視点が必要となっている。また、果物消費を増加させるためには、果物を「生存に欠かせない食物」、「心身を健やかにして豊に生活するための必需品」としなければならない。

46号で終刊となった果樹試験場ニュースの創刊号は昭和48年に刊行されたが、折しも48年は果実生産量がピークの年であった。すなわち果樹試ニュースの歴史は右肩下がりの27年間であった。新しい果樹研究所ニュースは、法人として、記録に残すべき物、活動報告等は新設される年報に譲り、生産者や消費者、行政、教育関係者等、広範な方々を対象にして、解りやすくコーディネートする機能を持たせたい。

農学者、横井時敬は東京農学校の授業で、実学主義教育研究の視点として「稲のことは稲に聞け」、「農業のことは農民に聞け」と説いておられた。果樹研究所はこのニュースを一つの媒体として、「生産者に慕われる研究所、消費者に信頼され、安心してもらえる研究所、研究者に敬われる研究所」になり、「果樹や果物のことは果樹研究所に聞け」を目指したいと思う。

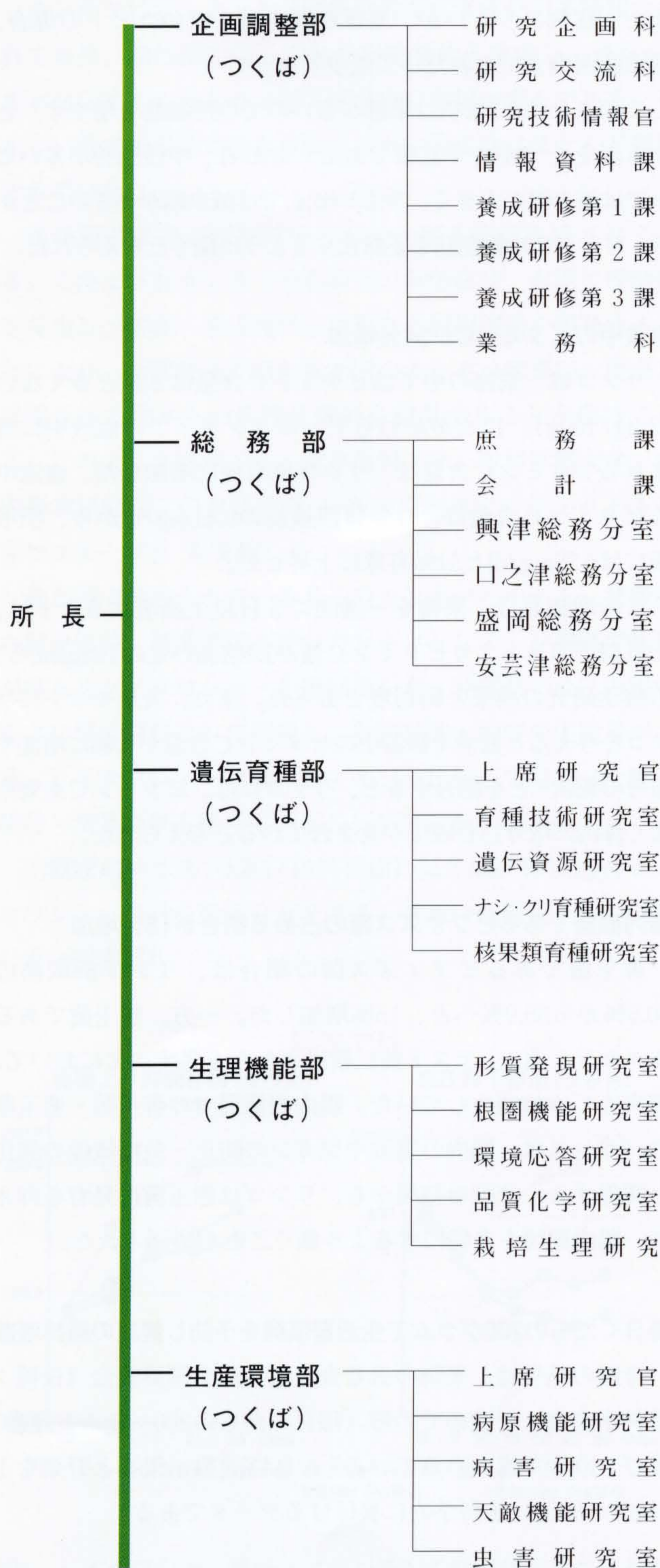
くだもの展示館①ーリンゴー



左からお盆と小皿、箸置（上下とも）、キャンドル（上）、キーホルダー（下）、楊枝入れ

◆独立行政法人農業技術研究機構 果樹研究所の組織

平成13年4月1日に独立行政法人農業技術研究機構
果樹研究所として新たな一歩を踏み出しました。
新組織は、次のとおりです。



(つくば)

カンキツ研究部



(興津)

カンキツ研究官



(口之津)

- 上席研究官
- 遺伝解析研究室
- 素材開発研究室
- 形質制御研究室
- 品質機能研究室
- 業務関係
- 育種研究室
- 栽培生理研究室
- 病害研究室
- 虫害研究室
- 業務科

リンゴ研究部



(盛岡)

- 上席研究官
- 育種研究室
- 栽培生理研究室
- 病害研究室
- 虫害研究室
- 業務関係

ブドウ・カキ研究部



(安芸津)

- 上席研究官
- 育種研究室
- 栽培生理研究室
- 病害研究室
- 虫害研究室
- 業務関係

研究の紹介

ヒト介入研究によるリンゴの健康増進効果の解明

生理機能部 品質化学研究室 田中 敬一

日本人の果物摂取量は諸外国より極端に少ない

四季折々に様々な果物が実る日本では、リンゴの収穫風景などが季節の到来を告げるニュースとして伝えられている。しかし、国際的に見ると、日本人の果物の摂取量は極めて少ない。一方、アメリカ等では果物と野菜を1日400～800g摂取する運動が展開されており、ガンなどの生活習慣病を予防し、健康の維持・増進に成功している。

世界各国の一人1日当たりの果物摂取量は、日本では129gで、欧米各国の半分以下であり、178カ国中117番目である(FAO統計1998)。また、家計調査ではもっと少なく、1日84.9g(総務庁2000)であった。おそらく、こちらの方がより実際に近い数字と考えられる。

なぜ、日本人は諸外国に比べるとあまり果物を食べないか。「果物は果糖が多く含まれているため、中性脂肪が増えるのが怖い」という健康知識も理由の一つと思われる。このことが実際に、マスコミ等で報道されることもある。

血液中の中性脂肪が21%減少

ヒト(ボランティア)介入研究では、リンゴを普通に食べてもらい、血液成分や腸内細菌叢の変化を測定した。腸内細菌叢へのリンゴ摂取の影響を調べるために、リンゴ以外の果物、ヨーグルト、納豆など腸内細菌叢に影響を与える食品は制限したが、その他の食事制限はしなかった。

被検者14名のうち12名で、血液中の中性脂肪の低下が確認された(図1)。リンゴ摂取前の中性脂肪の平均値は110mg/dlであったが、リンゴ摂取後87mg/dlとなり、21%有意に減少した。基準範囲(30～149mg/dl)の中間値90mg/dlより、もともと低かったヒトの場合の減少幅は小さかった。

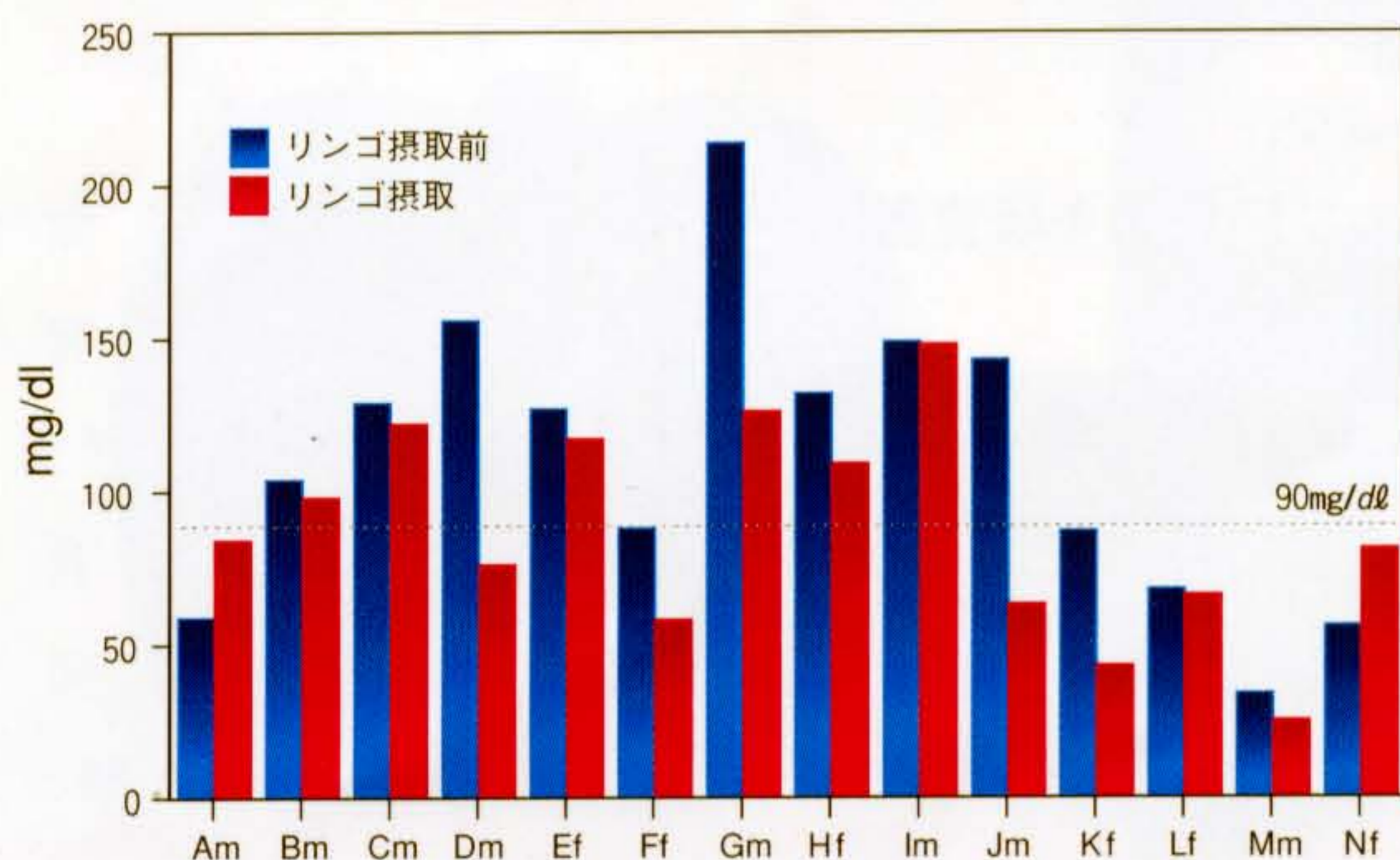


図1 血液中の中性脂肪含量

また、症例は少ないが、基準範囲を越えていたヒトの場合、基準範囲内まできわだって減少した。

このことは、「果物は果糖が多いので中性脂肪を増やす」とする説をくつがえす結果である。むしろ、中性脂肪が多いヒトでは減少幅が大きく、少ないヒトでは減少幅が小さいことから、リンゴは中性脂肪を正常化するように働くと考えられた。

血液中のビタミンCが34%増加

リンゴは、果物の中ではビタミンC含量はさほど多くない(3mg/100g)。にもかかわらず、ボランティアの血液に含まれるビタミンC含量は、リンゴ摂取後に増加した。血液中のビタミンC含量は、リンゴ摂取前の0.41mg/dlから、摂取後には0.55mg/dlと34%有意に上昇した。

この増加量は、果物を一週間に5日以上摂取するヒトは、1日以下のヒトよりビタミンC量が1.4倍高いとのTsuganeら²⁾の疫学研究の結果と同程度であった。また、モルモットにリンゴを与えると血液や臓器中のビタミンC含量が大幅に増加するとの報告¹⁾とを総合すると、リンゴには、ビタミンCを効率よく体内に取り込む成分が含まれていると考えられた。

腸内細菌であるビフィズス菌の占める割合が15%増加

善玉菌であるビフィズス菌の割合は、リンゴ摂取前の20.5%から35.9%へと、15%増加した。一方、悪玉菌であるウエルシュ菌は、テスト前に検出された6名すべてにおいて、消失もしくは減少していた。腸内細菌叢での善玉菌・悪玉菌のバランスは、腸内の腐敗や発ガンの防止・免疫機能の強化と関係する。今回の結果から、リンゴは悪玉菌の発育を抑えて、腸内環境を良好にするよう働くことが確認された。

毎日くだもの200グラムで生活習慣病を予防し健康の維持増進

今回の結果は、果物のある食生活推進全国協議会(後援:農林水産省)が進めている「毎日くだもの200グラム」運動、及び、欧米で進められている5 A DAY運動(果物と野菜を1日400～800g)を科学的に裏付けるデータである。

- 1) Sable-Amplis, R. et al (1991) Med. Sci. Res., 19, 107-108
- 2) Tsugane, et al (1998) Ann. Epi., 8, 378-383

研究の紹介

沖縄産カンキツシイクワシャーの健康維持・増進効果

カンキツ研究部 上席研究官 矢野 昌充

カンキツには、カンキツに特異的な化学成分が多種類含まれており、諸外国では、これらの特異的な化学成分に着目し、オレンジオイルのような加工副産物の利用が盛んである。しかし、我が国ではこのようなカンキツ副産物はほとんど利用されていない。

我が国では我が国独特のカンキツが多種類栽培されている。このようなカンキツから新しい有用成分、有用生理活性を見出し、生食・果汁向けとは異なる利用用途を開発することにより、消費低迷に悩む我が国のカンキツ産業に、従来とは異なる方向からの活性化素材を提供することが期待できる。このような観点から、東京薬科大学、中村学園大学、中国農業試験場との共同研究（「新需要創出プロジェクトカンキツグループ」）を実施した。

我が国で栽培されている多くのカンキツの中から、特徴的な健康維持・増進効果を持つカンキツとして、沖縄県で栽培が盛んなシイクワシャーを選び出した。沖縄県ではこの果実を主に果汁原料として利用し、年約1000t程度の生産量がある。シイクワシャーは他のカンキツと比較して際立った健康維持・増進効果を持っていることが明らかになった。

①糖尿病マウス（KKY^A自然発症）に1ml/体重kgのシイクワシャー果汁を投与したところ、有意に血糖値上昇を抑制した（図参照）。

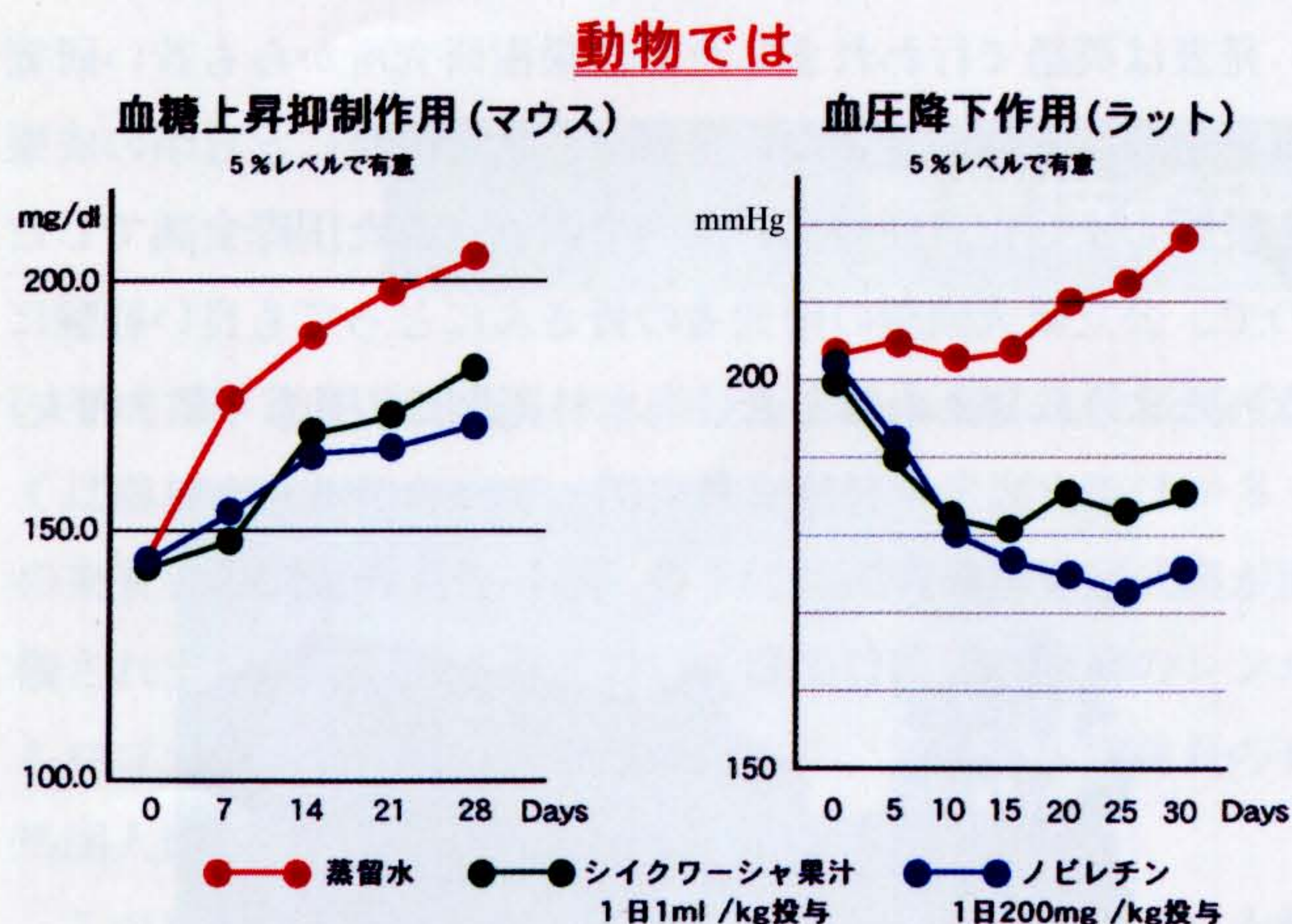


図1 シイクワシャー果汁・ノビレチンの糖尿病と高血圧予防

*2000年日本薬学会で口頭発表

②高血圧ラット（SHR自然発症）に1ml/体重kgのシイクワシャー果汁を投与したところ、有意に血圧上昇を抑制した。

③シイクワシャー加工製品にはノビレチンに代表されるカンキツ特有のフラボノイドポリメトキシフラボノイドが数〜数十mg/100g含まれている。ノビレチンを体重1kg当たり200mg与えることで、糖尿病マウスの血糖値上昇を有意に抑え（図）、高血圧ラットで血圧上昇を有意に抑えた。

④ヒト健常人ボランティアにシイクワシャーから調製したペースト（ノビレチン45.3mgに相当）を与えると血糖値が有意に低下し、インスリン分泌量も有意に減少した。また、血圧も低下の傾向を示し、血圧制御を行うレニン活性、アンジオテンシンⅡの低下も見られた。

⑤ポリメトキシフラボノイドは老化関連の疾患発症に関わる重要な酵素であるマトリックスメタロプロテアーゼと誘導型シクロオキシゲナーゼの合成を抑えた。このことから、この二つの酵素活性増大が重要な発症要因である関節リウマチ、変形性関節症、がん、動脈瘤、肺繊維症、糸球体腎症、歯周炎の予防などが期待される。なお、ノビレチンの発がん抑制、がんの転移抑制はラットを用いた実験で確認された。

⑥ポリメトキシフラボノイドは骨芽細胞での誘導型シクロオキシゲナーゼ合成を抑え、マクロファージの破骨細胞への分化を抑える活性が見られ、骨粗鬆症の発症予防が期待される。

我々はまたシイクワシャーの優れた健康維持・増進効果に関与していると見られるポリメトキシフラボノイドその他の機能性成分の果実成熟段階や加工工程における変動を解析した。また、シイクワシャー特有の芳香に関係する成分を明らかにした。

このような優れた特性を有するシイクワシャーは、現在未利用で機能性成分に富む搾汁粕の有効利用を含め、「保健機能食品」開発の有用な素材になり得ると判断し、今年度から新たなプロジェクト「カンキツ類の機能性成分を活用した保健機能食品の開発」（生研機構：新事業創出研究開発事業）をスタートさせている。

研究会報告

環境保全型果樹栽培における有機物の循環利用

平成13年度落葉・常緑・寒冷地果樹課題別研究会「環境保全型果樹栽培における有機物の循環利用」が、果樹研究所の主催により、平成13年5月10日から11日にかけて鹿児島県下で開催されました。この研究会は、有機性資源の再利用や、土壌診断に基づく堆肥の適切な使用等、環境保全型果樹栽培における有機物の循環利用の現状を取りまとめ、今後の研究開発に役立てることを目的として開かれました。1日目は有機物施用圃場の現地検討（垂水市周辺）及び2日目は室内検討（鹿児島市）が実施されました。

室内検討会では、環境保全型農業を促進する観点から、家畜ふん尿の有効利用技術と流通を考慮した家畜ふんペレット化堆肥の現状が述べられました。ペレット化により容積が減少し貯蔵性と輸送性が改善され、散布も容易になる利点が明らかとなりました。果樹のペレット化堆肥施用試験が紹介され、ポンカンとビワでは、ブレンド法、施用量の検討が行われま

した。温州ミカンでは、化学肥料の代替可能性も示されました。また、ミカン園に用いられるモミガラ資材の特性が評価されました。果樹の有機物施用試験では、ナシ園の堆肥施用による窒素収支の試験結果から、堆肥施用量の増加とともに環境負荷が増大することが示され、リンゴ園でも同様に土壌溶液の硝酸態窒素が増加しています。有機物施用と樹体生育との関係では、未熟土壌の熟畑化試験から、カキの樹体反応が解析され、リンゴでは有機物施用による土壌窒素肥よく度の変化と樹体生育の関係が検討されました。

今後の環境保全型果樹栽培の問題として、養分収支と施用量、連用期間の関係等について具体的データの積み重ねと、環境影響モニタリングの重要性が指摘されました。

検討会2日間の出席者は、大学、公立試験研究機関・行政部局、独立行政法人など合計88名でした。

（生理機能部 梅宮善章）

アジアナシに関する国際シンポジウム

ナシ品種「二十世紀」の生誕100年を期に鳥取県倉吉市に建設された「鳥取二十世紀梨記念館」の開館にあわせ、併設の倉吉未来中心を会場に「アジアナシに関する国際シンポジウム」が8月25～29日に開催されました。東はカナダ、ブラジルから西はフランス、ベルギーまでの14カ国、約150名の研究者の参加があり、世界のアジアナシに対する関心の高さが伺われました。



会場を飾る「二十世紀」果実を取り入れた生花

片山鳥取県知事の基調講演を皮切りに6つのシンポジウムと一般講演として37の口頭発表、56のポスター発表が行われました。27日には公式の夕食会が開かれて外国人研究者との

交流をさらに深めることができましたが、外国からの参加者にはお茶席なども用意され、その雰囲気を楽しんでもらえたようです。最終日の29日には鳥取県園芸試験場、「ゴールド二十世紀」栽培農家、JA東郷町ナシ選果場、鳥取大学果樹園等を見学し、鳥取大学でのお別れパーティーをもって無事終了しました。

発表は英語で行われましたが、果樹研究所からも若い研究員を中心に大勢が参加し、発表に、また座長にと日頃の成果を披歴しました。同時に、国内で開催された国際会議でしたので、公立研究機関の研究者の皆さんにとっても良い経験になったように思われました。

（遺伝育種部 壽 和夫）



倉吉未来中心、左半分が鳥取二十世紀梨記念館

トピックス

一般公開

平成13年度の一般公開は、例年と異なり、独立行政法人農業技術研究機構果樹研究所となって初めての公開であったこと、花き研究所と合同で開催したこと、メインの展示会場が花き研究所共用大会議室になったこと、また、駐車場が拡張されたことなど、多くのことがらで初めての試みがありました。法人化に向けての作業と会場の都合で、準備期間が短いなどの悪条件も重なりましたが科学技術週間中の4月19日に開催しました。今にも雨が降り出しそうな天気にもかかわらず、1918名の見学者が訪れ、研究成果や展示物について熱心に質問したり、説明を受けたり、また、接ぎ木体験や実験には大変興味を示し、楽しんでくださいました。(事務局)



いろいろな果実の展示風景

サイエンスキャンプ 2001



モモの特性調査実習

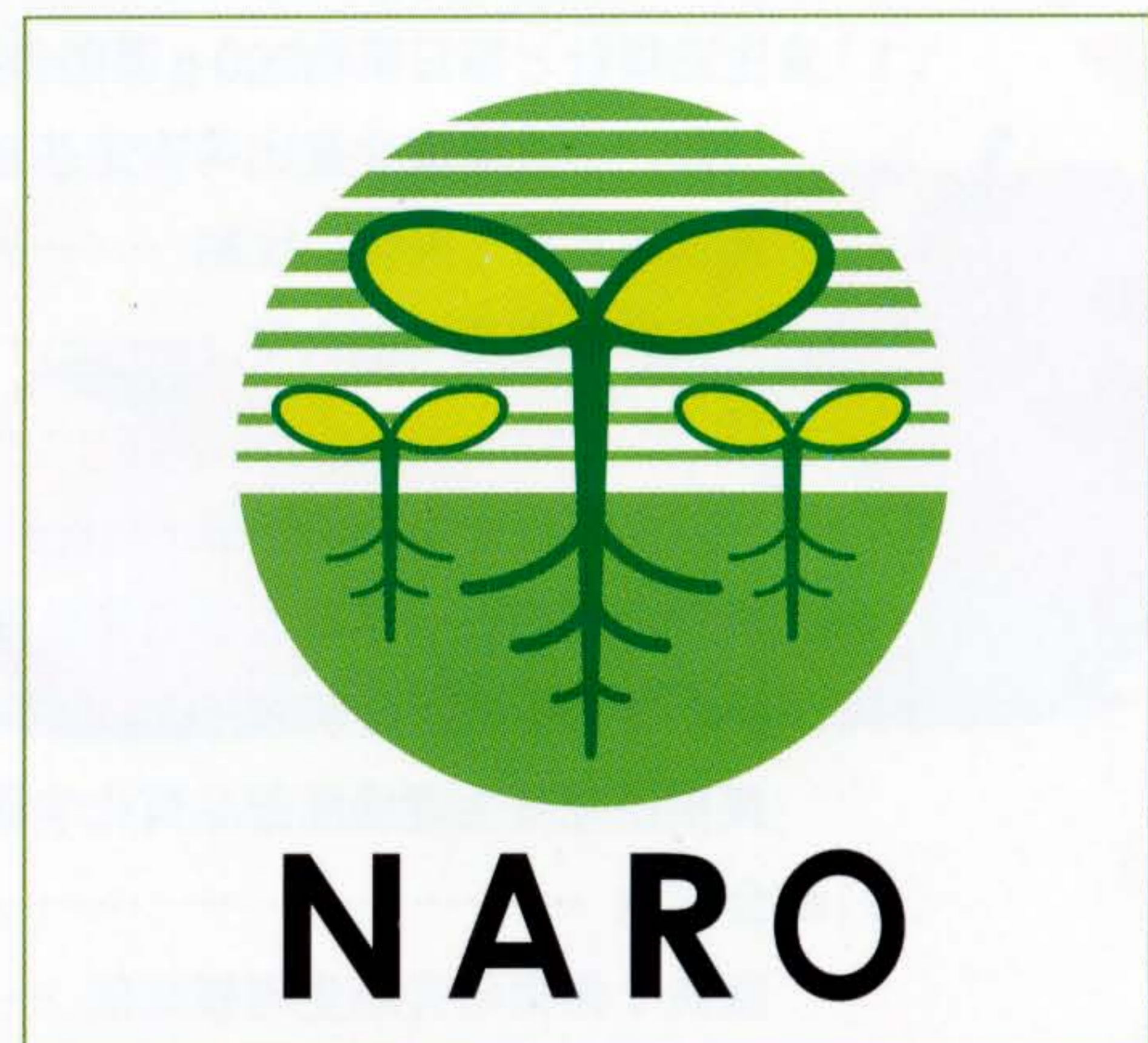
8月7～9日にかけてサイエンスキャンプを開催し、北は青森県、南は沖縄県と全国から11名の高校生が参加し、なかには、当研究所の研究成果「シイクワシャーの機能性」の記者発表を知り、応募してきた沖縄県大宜味村のシイクワシャー生産農家の高校生も参加しました。

今年のプログラムは昨年と比較して大幅に変更し、果物はモモをメインに据え、実験・実習は2班に分かれての少人数制を多く取り入れました。女子が多かったので、モモは好評でした。また、2班に分けての実習・実験は内容の濃い実験や実習になり学校では経験できないと好評でした。(事務局)

農業技術研究機構発足式典

平成13年9月4日に農林水産技術会議事務局筑波事務所つくば農林ホールにおいて、田中眞紀農林水産副大臣ほか多くの来賓者の列席のもと(独)農業技術研究機構発足式典が開催されました。この式典において農業技術研究機構のシンボルロゴマークが紹介されました。また、元東京大学総長の有馬朗人氏の記念講演もありました。

この発足式典に先立ち、つくばリサーチギャラリーの大幅な展示模様替えが行われ、果樹研究所、野菜茶業研究所、花き研究所の3機関合同で園芸ブースに研究成果の展示や「消費者のニーズに応え、地域特性を生かした園芸農業」等の展示を行いました。(事務局)



農業技術研究機構ロゴマーク

Health

毎日くだもの200グラム運動が始まる

近年の日本人の食を巡っては、健康・栄養についての適正な情報の不足、食習慣の乱れ、食べ残しや食品廃棄物の増加などにより、生活習慣病の増加や食料自給率の減少、食料資源の浪費など、数多くの問題に直面している。こうしたことから、平成12年3月文部省（現文部科学省）、厚生省（現厚生労働省）、農林水産省の3省庁は「食生活指針」を定め、さらに厚生省では、生活習慣病の増加や高齢化に伴う心身機能の低下が社会的問題になっていることから、平成12年から22年までの10年間の目標を示した「21世紀における国民健康づくり運動（健康日本21）」を推進している。

「食生活指針」では、「野菜・果物、牛乳・乳製品、豆類、魚なども組み合わせ」とされ、「たっぷり野菜と毎日の果物でビタミン、ミネラル、食物繊維をとりましょう」が実践スローガンの一つとされ、「健康日本21」では、「1日の食事で、果物類を摂取している人を現状の29.3%（成人、平9）から平成22年には60%以上に増加させる」との目標を掲げている。

こうした中で、平成12年8月以来、果物を毎日の食生活に欠かせない食品として定着させるため、①果物の食品としての特性、機能について正しい知識を広める。②果物の摂取目標量についての知識を広める。③果物の選び方・食べ方・料理方法についての知識を広める。の3点を課題として、生産、流通、消費の各団体、農学、医

学、栄養学、食生活指導、料理等の関係者からなる「果物のある食生活推進全国協議会」（事務局は中央果実基金）が設けられ、専門委員会などで検討を重ねてきた。そして平成13年8月に、「毎日くだもの200グラム運動」として運動指針を公表し、科学的な情報を活用し、各団体で、また相互に連携し多様な取り組みを行っている。

果樹研究所は、かねてから果実の健康機能性に着目した試験研究に取り組んできたが、本運動にも試験研究面から大きく関わっており、企画調整部長が委員及び専門委員として、品質化学、品質機能両研究室長が調査連絡会委員としてその推進に貢献している。

すでに、ロゴマーク、パンフレット、ポスター等の広報資材を作成・頒布し、販売流通現場や普及・宣伝で活用が始まっている。また、8月、11月には東京でシンポジウムが行われ、来年1月24日には、つくば農林ホールにおいて、果樹研究所と中央果実基金の共催で公開シンポジウム「果物から健康へのアプローチ」を行うこととしている。

果物の栄養や健康増進など多様な働きを解明し、果物情報を広く正しく伝え、食生活の中にもっともっと果物を取り込み、果物のある食生活を通じた健康管理や、果実需要の拡大、そして果樹産業振興にも寄与できればと期待は大きい。

（企画調整部 駒村研三）

第1回

果樹研究所公開シンポジウム 「果物から健康へのアプローチ」

I. 趣旨

本シンポジウムでは、「食生活指針」の意義や食生活における果物の役割について広く論議するとともに、果実の有する機能性について消費者の理解を深めること等により、果物を通じた食生活の改善による健康増進に寄与し、ひいては果実の消費低迷から脱却して消費の拡大を図ろうとするものである。

II. 開催日時 平成14年1月24日（木）9：30～12：20

III. 開催場所 農林水産省農林水産技術会議事務局筑波事務所つくば農林ホール

IV. 主催 独立行政法人農業技術研究機構 果樹研究所 （財）中央果実生産出荷安定基金協会

V. 話題提供等

挨拶	9：30～9：50
（独）農業技術研究機構果樹研究所	梶浦 一郎 所長
（株）中央果実生産出荷安定基金協会	細田 敏昭 専務理事
農林水産省生産局果樹花き課	宮田 悟 課長
（1）食生活指針と毎日果物200g運動の推進について	9：50～10：10
（財）中央果実生産出荷安定基金協会	細田 敏昭 専務理事
（2）栄養学から見た果物の役割	10：10～10：40
千葉県立衛生短期大学	渡邊 智子 助教授
休憩	10：40～10：50
（3）リンゴと生活習慣病の予防	10：50～11：20
青森市民病院（弘前大学名誉教授）.....	武部 和夫 院長
（4）果樹における機能性解析研究	11：20～11：50
果樹研究所生理機能部品質化学研究室	田中 敬一 室長
（5）総合討論	11：50～12：20
座長：果樹研究所生理機能部	福元 将志 部長

◆表彰・受賞

農林水産功績者 (2001.4)

「カンキツ類の健康維持・増進効果の解明」

矢野昌充 (カンキツ研究部 上席研究官)

「カンキツのがん予防に関する基礎的研究」(生研機構基礎研究推進事業)及び「新需要創出プロジェクト」において、医学、薬学、食品栄養学などの大学、民間企業等との共同研究を組織し、カンキツが含有する新規発がん抑制物質として β -クリプトキサンチン、オーラプテン、ノビレチンの3種の成分を新たに発見し、またミカンを多く食べる人には心臓病、糖尿病、高尿酸血症、痛風が少ないことや、沖縄特産のシクワシャーの果汁が有する血圧・血糖値上昇抑制効果を発見した。これらをもとに、果樹行政や生産流通団体などに多くの科学的で正確な情報を提供し、果物を毎日摂取する食生活の改善や果実消費拡大、および果樹産業の振興に大きな貢献をした。

園芸学会功績賞 (2001.4)

「リンゴとモモの長期窒素施用試験による合理的施肥法確立に関する研究」

福島県果樹試験場 落葉果樹土壌肥料指定試験グループ
(駒村研三、福元将志ほか)

果樹土壌肥料指定試験として、リンゴ「ふじ」、「紅玉」及びモモ「あかつき」等の20数年にわたる長期圃場試験を通じ、窒素施肥の量・時期の樹体生育や果実の生産・品質等に及ぼす影響の解明、 ^{15}N 標識肥料による土壌-草-樹体間の施肥窒素及び土壌窒素の動態、ならびにリンゴ園における養分の吸収・蓄積・園外収奪等の循環を解析し、窒素の適正施用量や効果的施肥時期を明らかにした。これらの成果は、落葉果樹園における養分の動態と機能の定量的解析を行うとともに、土壌肥沃度に応じた秋基肥体系や施肥量の節減等の施肥基準の改訂、環境負荷の低減及び高品質果実生産技術の確立に大きく貢献した。

園芸学会賞奨励賞 (2001.4)

「果樹における有用遺伝子の単離と形態形成制御機構の解明に関する研究」

村上ゆり子 (企画調整部 研究企画科)

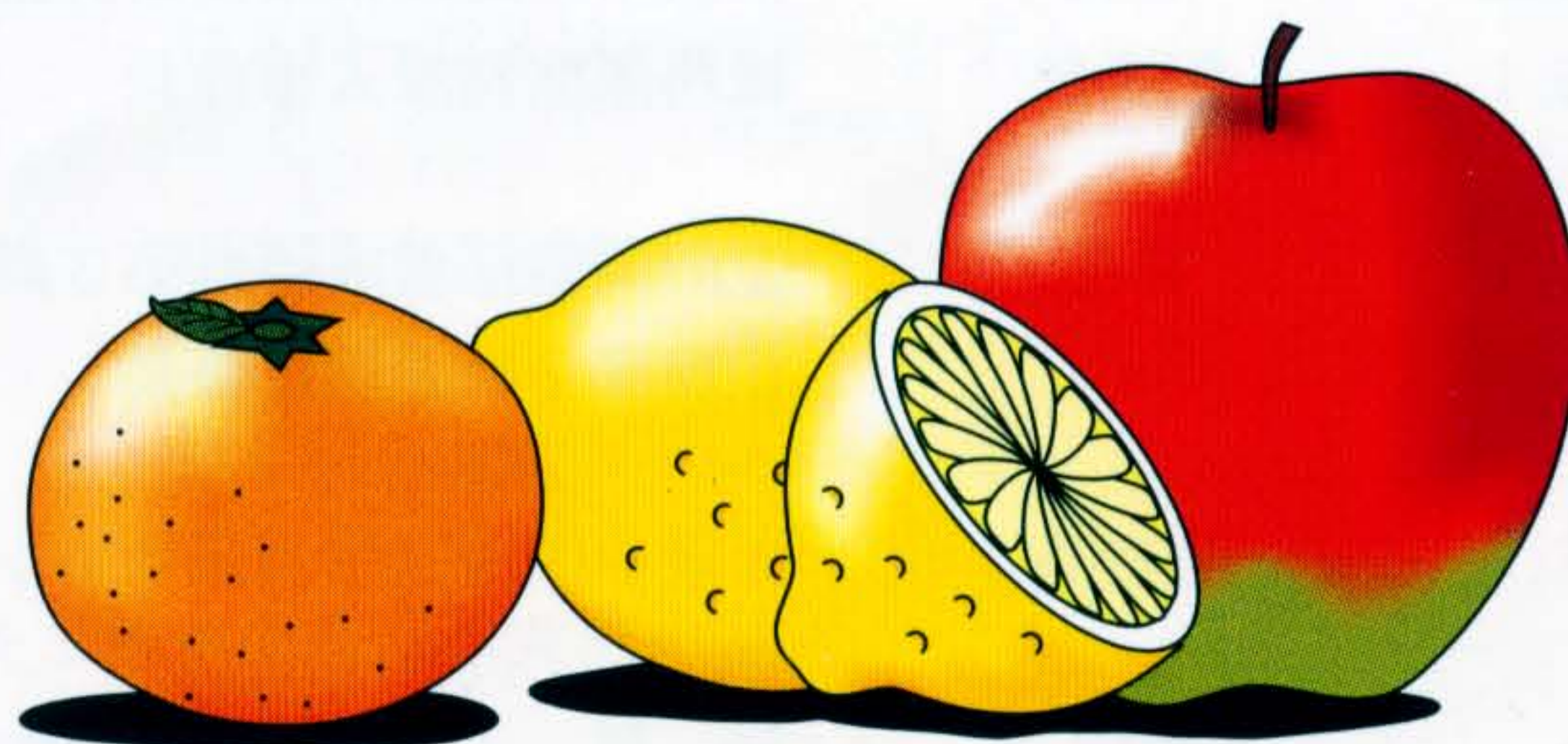
形態制御に関連すると考えられるホメオボックス遺伝子OSH-1をイネから初めて単離し、構造を解析するとともに、OSH-1遺伝子を導入したキウイフルーツ等の形質転換植物を作成し、わい化個体を得た。さらに、このわい化物質がジベレリン生合成経路の遺伝子の発現制御によることを明らかにし、果樹の形態制御への道を開いた。また、外来遺伝子を果樹等に導入する場合の遺伝子発現制御メカニズムの一端を明らかにするとともに、ゲノムDNAを用いたフィンガープリント法及びRAPD法による果樹の品種識別に初めて成功し、果樹や園芸作物の迅速かつ簡便な品種識別技術確立に道を開いた。

日本植物病理学会学術奨励賞 (2001.4)

「カンキツ緑かび病菌のABCトランスポーター遺伝子に関する研究」

中畝良二 (ブドウ・カキ研究部 病害研究室)

植物病原糸状菌の薬剤耐性においてABCトランスポーターという細胞膜を貫通する輸送タンパク質が重要な役割を果たしていることを遺伝子レベルで解明した。最近、植物-植物病原糸状菌の相互作用におけるABCトランスポーターの役割が注目されており、今後の一層の発展が期待される。



掲 示 板

◆人事異動名簿

(平成13年4月1日～平成13年9月30日)

異動年月日	異動事由	新	旧	氏 名
13. 4. 1	転任	総務部長	中国農業試験場総務部長	山口 進
"	"	総務部会計課専門職 (施設)	家畜衛生試験場総務部用度課 課長補佐	鎌田 信義
"	"	総務部口之津総務分室長	九州農政局総務部管財課課長補佐	宮本 秀範
"	"	総務部盛岡総務分室長	北海道農業試験場総務部管理官	藤井 孝咲
"	"	リンゴ研究部虫害研究室長	農業研究センター病害虫防除部 主任研究官 (虫害研究室)	刑部 正博
"	採用	企画調整部 (研究企画科)		松本 光
"	"	企画調整部 (研究企画科)		高橋 太郎
"	"	企画調整部 (研究企画科)		高橋 佐栄
"	"	企画調整部養成研修第1課 専門職 (教務)	生物系特定産業技術研究推進機構 総務部用度課課長補佐	村谷 安雄
"	"	総務部庶務課 (庶務係)		芝原 希
"	"	生理機能部 (形質発現研究室)		喜多 正幸
"	"	リンゴ研究部主任研究官 (育種研究室)	山形県 (農林水産部農畜産振興課果樹係長)	石黒 亮
"	配置換	大臣官房経理課経理調査官	総務部長	高松 尚志
"	出向	農業技術研究機構統括部付 兼独立行政法人農業工学研究所 企画調整部情報資料課広報専門官	企画連絡室養成研修第2課長	紀村 信勝
"	"	花き研究所総務課 (庶務係)	総務部庶務課 (庶務第1係)	保立 泰男
"	"	中央農業総合研究センター 総務部会計課 (調達係)	総務部会計課 (会計係)	長江 信一
"	"	近畿中国四国農業研究センター 総務部庶務課課長補佐	総務部口之津総務分室長	原田 睦朗
"	"	独立行政法人家畜改良センター 総務部営繕専門役	リンゴ支場庶務課長	齊藤 義雄
"	"	花き研究所生理遺伝部 育種工学研究室長	育種部主任研究官 (育種技術研究室)	大宮 あけみ
"	"	農業技術研究機構総合企画調整部 企画調整室主任研究官	保護部主任研究官 (病原機能研究室)	加納 健
"	"	東北農業研究センター総合研究部 (総合研究第4チーム)	カンキツ部 (栽培生理研究室)	藤澤 弘幸
"	"	独立行政法人国際農林水産業研究 センター沖縄支所 (熱帯果樹栽培利用研究室)	リンゴ支場 (育種研究室)	加藤 秀憲
"	"	東北農業研究センター総合研究部 総合研究第4チーム長 兼果樹研究所リンゴ研究部	リンゴ支場栽培生理研究室長	増田 哲男
13. 4. 30	退職	生物系特定産業技術研究推進機構へ	総務部庶務課人事係長	高田 幸一
13. 5. 1	配置換	総務部庶務課人事係長	動物衛生研究所総務部会計課 用度係長	川崎 義徳
13. 6. 1	昇任	企画調整部養成研修第3課長	総務部会計課用度係長	田所 則夫
"	"	総務部会計課用度係長	中央農業総合研究センター 総務部会計課 (予算決算係)	村上 拓
"	配置換	近畿中国四国農業研究センター 総合研究部総合研究第2チーム長	ブドウ・カキ研究部 栽培生理研究室長	森永 邦久
"	退職	勸 奨	企画調整部養成研修第3課長	久島 敏信
13. 8. 1	配置換	カンキツ研究部 (品質機能研究室)	企画調整部 (研究企画科)	松本 光
"	"	カンキツ研究部 (育種研究室)	企画調整部 (研究企画科)	高橋 太郎
"	"	リンゴ研究部 (育種研究室)	企画調整部 (研究企画科)	高橋 佐栄
13. 9. 1	退職	勸 奨	生産環境部長	工藤 晟

◆職員の研修名簿

(平成13年4月1日～平成13年9月30日)

研修名	氏名	所属	期間	備考
第35回国家公務員合同初任研修	高橋 太郎	企画調整部	13.4.3～13.4.6	総務省及び人事院
〃	高橋 佐栄	〃	〃	〃
〃	松本 光	〃	〃	〃
平成13年度 I 種試験採用者研修	高橋 太郎	企画調整部	13.4.9～13.4.13	農林水産研修所
〃	高橋 佐栄	〃	〃	〃
〃	松本 光	〃	〃	〃
平成13年度 I 種試験採用者専門研修(研究職コース)	高橋 太郎	企画調整部	13.4.16～13.4.19	農林水産技術会議事務局
〃	高橋 佐栄	〃	〃	〃
〃	松本 光	〃	〃	〃
〃	喜多 正幸	生理機能部	〃	〃
第24回研究交流センター英語研修(初級コース)	浅田 幸子	総務部	13.4.18～13.12.10 (50回)	文部科学省研究交流センター
平成13年度 III 種試験採用者研修	芝原 希	総務部	13.4.23～13.4.26	農林水産研修所
平成13年度一般職員行政基礎研修(行政コース・第1班)	寺田 勝治	総務部	13.5.9～13.6.6	農林水産研修所
平成13年度農作物鳥害防止対策研修	鈴木 勝征	企画調整部	13.6.14	農林水産省生産局
平成13年度農作物獣害防止対策研修	潮田 伸雄	企画調整部	13.7.17～13.7.19	農林水産省生産局
平成13年度係長行政研修 I (第1班)	小野 任博 久田二三彦	総務部 口之津総務分室	13.7.2～13.7.13 〃	農林水産研修所 〃
平成13年度一般職員行政基礎研修(行政コース・第2班)	田中 敏浩	総務部	13.8.30～13.9.28	農林水産研修所

◆渡航実績(4月～9月)

氏名	所属	渡航目的	期間	主要訪問都市	備考
羽山 裕子	生理機能部 栽培生理研	第5回国際モモシンポジウム出席	13.7.8～13.7.11	アメリカ合衆国 デービス	園芸学会国際交流基金助成
本多 親子	生理機能部 形質発現研	第98回アメリカ園芸学会出席	13.7.20～13.7.26	アメリカ合衆国 サクラメント	
古藤田信博	リンゴ研究部 育種研	第98回アメリカ園芸学会出席	13.7.20～13.7.26	アメリカ合衆国 サクラメント	加藤記念国際交流助成金
井原 史雄	生産環境部 天敵機能研	B I O T E C 研究所訪問	13.8.9～13.8.13	タイ バンコク	
佐藤 威	生産環境部 天敵機能研	第4回アジア太平洋昆虫学会議出席	13.8.13～13.8.18	マレーシア クアラルンプール	
井原 史雄	生産環境部 天敵機能研	第4回アジア太平洋昆虫学会議出席	13.8.13～13.8.18	マレーシア クアラルンプール	
三代 浩二	カンキツ研究部 虫害研究室	第4回アジア太平洋昆虫学会議出席	13.8.12～13.8.18	マレーシア クアラルンプール	
伊東 明子	生理機能部 栽培生理研	9th International Symposium on Plant Bioregulators in Fruit Production 出席・発表	13.8.19～13.8.23	韓国 ソウル	
松田 長生	遺伝育種部 育種技術研	中国東北農業大学生命科学学院の視察と講演	13.9.17～13.9.25	中国 ハルビン	招待(中国政府)
佐藤 明彦	ブドウ・カキ 研究部育種研	中国の完全甘ガキ品種の特性とその遺伝性に関する現地調査	13.9.8～13.9.16	中華人民共和国 西安, 武漢	科研費

◆国際協力派遣（4月～9月）

氏名	所属	派遣内容	期間	派遣先国	派遣の種類
村松 昇	生理機能部品質化学 研究室主任研究官	「南ブラジル小規模園芸研究計画」 (植物生理)	13.4.3～13.5.16	ブラジル	JICA 短期専門家
工藤 晟	生産環境部長	「南ブラジル小規模園芸研究計画」 終了時評価(栽培・病害虫)	13.6.17～13.7.1	ブラジル	JICA 調査団
壽 和夫	遺伝育種部ナシ・クリ 育種研究室長	「南ブラジル小規模園芸研究計画」 終了時評価(育種・選抜)	13.6.17～13.7.1	ブラジル	JICA 調査団
根角 博久	カンキツ研究部素材 開発研究室主任研究官	メコンデルタにおける果樹の収量増加及び 病害虫軽減のための整枝・剪定法に関する研究	13.7.31～13.8.28	ベトナム	JIRCAS 短期専門家

◆依頼研究員（4月～9月）

氏名	所属	試験研究課題	期間	受け入れ研究室
星 保宣	福島県果樹試験場	貯蔵炭水化物の定量と 簡易測定法開発	13.6.1～13.8.31	生理機能部根圏機能研究室
新谷 勝広	山梨県果樹試験場	核果類の品種及び台木特性に関する 知識や技術の習得	13.6.11～13.9.11	遺伝育種部核果類育種研究室
東 光明	熊本県農業 研究センター	果実成熟過程メカニズムの 知識及び果肉分析手法の修得	13.6.21～13.9.19	生理機能部栽培生理研究室
伊藤 政雄	高知県農業技術 センター果樹試験場	園地及び施設環境下における 果樹・果実生育の生理・生態的研究	13.7.2～13.9.28	生理機能部環境応答研究室
大場 誠司	宮城県大河原地域 農業改良普及センター	カキ品種の特性解明	13.9.1～13.11.30	ブドウ・カキ研究部育種研究室
明賀 久弥	愛媛県工業技術 センター	カンキツの機能性成分の分離・ 定量法と機能性評価の修得	13.9.3～13.11.30	カンキツ研究部品質機能研究室
押田 正義	千葉県農業総合 研究センター	果樹における根系の機能性の解析	13.9.17～13.12.16	生理機能部根圏機能研究室

【表紙の写真に一言】

昭和14年園芸試験場東北支場で国光×デリシャスの交配実生から選抜された、国が育成した最初のリンゴで、昭和37年、育成地藤崎の地名から、また日本一の名峰富士山のように育てとの思いで、りんご農林1号「ふじ」と命名された。今やわが国のみならず世界第3位の品種となっている。その原木は現在も盛岡市の果樹研究所リンゴ研究部の圃場で勇姿を誇っている。
(企画調整部 駒村研三)

あしがき

今年の4月1日に独立行政法人農業技術研究機構果樹研究所として新たな一步を踏み出しました。所長は巻頭言で、果樹研究所のこれからの広報のあり方には大きな変化が求められようと言っておられます。このような背景のもとで「果樹研究所ニュース」は生まれました。この「果樹研究所ニュース」を通して多くの方々に私たちの情報を提供するとともに、果樹研究を知っていただき、果樹研究および果樹産業の発展に役立つことを期待した果樹研究所の広報誌です。これから年4回の発行を目指しております。



果樹研究所ニュース 創刊号(平成13年12月20日)

編集・発行: 独立行政法人 農業技術研究機構 果樹研究所 National Institute of Fruit Tree Science

事務局: 企画調整部 情報資料課 TEL 0298-38-6454

住所: 〒305-8605 茨城県つくば市藤本2-1 <http://fruit.naro.affrc.go.jp/>